

しかし私は、今回のプーチン大統領の動きは実にもごとだっただけだと思っています。というのは、最終的にはベラルーシ大統領の仲介で、今回の事件は次のように解決されたからです。

(1) プリゴジンを「反逆罪」の罪に問わない

(2) ワグナー軍団はベラルーシに移動する

(3) ワグナー軍団の兵士は3つの選択肢のどれを選んでよい。①ロシア軍の正規兵として登録する、②ベラルーシのワグナー軍団に残る、③退役して自宅に帰る

しかもワグナー軍団がロストフ市の兵舎を占拠したときも、モスクワに進軍しているときも、ロシア軍をワグナーと戦闘させることはなく、内戦にしないで事態を収束させることが出来たからです。

ワグナー軍団が蜂起した直後に空軍が出撃し、空軍に20名ほどの死者が出たようですが、その出撃命令はすぐに取り下げられました。これもプーチン大統領の指揮下でおこなわれたことです。

一部にベラルーシ大統領ルカシェンコの動きこそ賞賛されるべきだという意見もありましたが、ルカシェンコもプーチン大統領と連絡を取りながら行動していたわけで、彼単独

の判断や行動ではありませんでした。こうして血なまぐさい内戦になることは避けられませんでした。

このように、「プリゴジンの乱」は線香花火のように終わってしまいましたから、アメリカやNATO諸国、そしてキエフ政権が小躍りして喜んだのも「束の間の夢」に終わってしまいました。そしてプーチン政権は支持率を下げるどころか、これを契機にかえって国内の団結を強めることが出来ました。

このようなことを考えると、プーチン大統領はプリゴジンやワグナー軍団の動きを予め知っていて、プリゴジンを「泳がせて」、それを口実にしてワグナー軍団をベラルーシに移動させたのではないかとすら思われます。というのはプリゴジンが決起したとき、彼に同調するロシア軍幹部が誰ひとり現れなかったからです。

(この「プリゴジンの乱」がプーチン大統領の「やらせ」作戦だったという解釈は、高名な評論家ペペ・エスコバルも、ロシア伝来の軍事作戦「マスキロフカ」という用語を使って説明しています。(追記2)を参照)

しかも、この「反乱」の日は、ウクライナ戦線では戦闘が続いていて、そこで戦っているロシア軍の部隊には何の動揺も見られず、ウクライナ軍との戦闘で、そのまま堅い守りを維持していました。

ここでワグナー軍団を迎え撃つためにロシア軍の一部をモスクワに差し向けていれば、それこそCIAやウクライナ軍の「思う壺」だったことでしょう。

さらに、ここで、もう一つ「おまけ」があります。

ロシアと同盟を組んでいるベラルーシの軍隊は、NATO軍とりわけポーランド軍からいつ攻撃を受けるか分からない状態にあります。この弱小のベラルーシ軍に百戦錬磨のワグナー軍団が加わることになったわけですから、ルカシェンコ大統領にとっては、まさに「柵からぼた餅」だったことでしょう。私が今回のプーチン大統領の動きがみごとだったと考えるゆえんです。

10

この記事を書くにあたって、いろいろ調べているうちに見つけた興味深い事実を、あとひとつだけ報告して、本章を終わります。それはM・K・バドラクマールという元インド外交官が書いた次の小論です。

\* The Rise and Fall of a Russian Oligarch 「ロシア・オリガルヒの興亡」

<http://trimethodblog.fc2.com/blog-entry-1734.html> (翻訳NEWS) 2023/07/04)

元インド外交官バドラクマール (M.K.Bhadrakumar)  
<https://indianpunchline.com/wp-content/uploads/2018/09/Photo-2.jpg>



以下にこの小論の興味深い箇所のみを紹介することにします。

プリゴジンは、二〇〇〇年の夏にプーチン大統領がクレムリンでおこなった歴史的な会議で線引きした有名な「レッドライン」を越えてしまったのだ。

この会議には、ロシアで最も裕福な21人（「強欲なオリガルヒ」とロシア人が嘲笑的に呼ぶようになっていた）が集まった。彼らはどこからともなく現れ、周囲の混乱と陰謀的な取引、明確な腐敗、さらには殺人を通じて莫大な富を蓄積し、ロシア経済の大部分、そして次第に芽生えたばかりの民主主義を掌握していた。

この非公開の会議で、プーチン大統領は彼らに直接、ロシアに本当に責任を持っているのは誰か、を告げたのだ。プーチン大統領はこのオリガルヒたちとある取引の提案をした。

「ロシア国家の権威に従い、ロシアの統治や国内政治に干渉しない限り、邸宅、スーパーヨット、自家用ジェット、そして数十億ドル規模の企業を保持できる」というものだった。

数年後、この取引を守らなかつたオリガルヒたちは、高い代償を払うことになった。150億ドル（2兆1600億円）の資産を持ち、かつてはフォーブスの億万長者リストで16位

に入っていたミハイル・ホドルコフスキーの事例は最も有名。

彼は政治的野心を抱いた。現在はアメリカで亡命生活を送っており、アメリカのシンクタンクや西側世界の各国にいるロシア嫌悪活動家に富を注ぎ、プーチンへの憎悪を吐き出している。

私はプーチン大統領が二〇〇〇年にロシアで「オリガルヒ」と呼ばれる新興財閥とこのような取引とりひきをしたことを知りませんでした。

彼らはソ連が一九九一年に崩壊した後、今まで国有だった財産を利用して大富豪になっていき、ロシアに巨大な貧富の格差社会をつくりあげたわけですが、その裏にアメリカ流「新自由主義の経済政策」が導入されたという事実がありました。

この貧困化したロシアを建て直す仕事に着手したのが、プーチン氏が大統領になった二〇〇〇年だったというわけです。このときプーチン氏は、ロシア財政再建のため新興財閥「オリガルヒ」の脱税を取りしまり始め、先述のような取引を財閥に提案して彼らと対決しました。

11

私は今まで、このような具体的事実を知らなかったのですが、では右で引用した、「プー

チン大統領が二〇〇〇年の夏にクレムリンでおこなった歴史的な会議で線引きした有名な『レッドライン』を、プリゴジンは越えてしまった」とは、どのような事実をさすのでしょうか。

その説明をさらに、この小論から引用することにします。(傍線は寺島)

しかし、他方、残留した「忠実派」は、超大金持ちになり、信じられないほどの豪勢な暮らしぶりだ。下層階級出自のプリゴジンは残留し、巨額の富を築いた。ある意味で彼の存在は、ソビエト後のロシア再生における途轍もない過ちすべてを象徴している。

しかし、残留した人々でさえも、彼らの略奪物のかなりの部分をロシアの届かない範囲で、銀行の金庫や動産・不動産資産として西側諸国に保管していた。これはつまり、オリガルヒたちも西側からの脅迫に極めて脆弱であることを意味している。

予想どおり西側各国政府は、オリガルヒたちがクレムリン政権を内部から崩壊させる手助けをする可能性があると考えており、または社会の崩壊を引き起こしてロシアを不安定化させ、ウクライナでの戦争の取り組みを混乱させることができると期待している。

プリゴジンの出自は誰にもわからない。しかし、クレムリンの権力の中でも特に大きな影響力を持つとされるこの人物が、西側の情報機関の狙いの的まきになっていく可能性は当然考えられ

る。プリゴジンの個人資産は少なくとも12億ドル（1700億円）以上だ。

プリゴジンはまた一種草分け的人物で、準国家的傭兵会社の経営という非常に実入りのいい職種に進出した。その会社の傭兵たちはロシアが商業的、政治的または軍事的に重要な利益を持つ国々の海外の緊迫地域で軍事契約者として行動するための訓練を受け、装備を与えられた。

右記では「プリゴジンの出自は誰にもわからない」と書かれていますが、ウイキペディアでは次のように書かれています。

「一九九〇年、プリゴジンと継父はホットドッグを販売するネットワークを立ち上げた。程なくニューヨークタイムズ紙のインタビューを受けており、『母親が勘定しきれないほどのルーブルが、またたく間に積み重なった』という」

これを読む限り、プリゴジンは食品販売から仕事をスタートさせ、後に「ニューアイランド」と呼ばれる水上レストランを始めて、それはサンクトペテルブルクで最も流行したレストランの一つとなったようです。

またその後のプリゴジンについては、ウイキペディアは次のように書いています。

「二〇二二年にプリゴジンは家族をバスケットボールコートとヘリコプター発着所付きのサントペテルブルクの邸宅に引越した。彼はプライベートジェットと約35メートルのヨットを所有している」

これを見るとプリゴジンの資産はますます膨れあがっていったようです。しかし、それでもプーチン大統領が二〇〇〇年に提起した「レッドライン」を越えない限り、彼の身は安泰でした。しかし今回の「反乱」で彼は遂にその「レッドライン」を越えてしまったというわけです。念のためにその「レッドライン」を次に再掲しておきます。

ロシア国家の権威に従い、ロシアの統治や国内政治に干渉しない限り、邸宅、スーパーヨット、自家用ジェット、そして数十億ドル規模の企業を保持することができる。

12

さて、このように内戦の危機を乗り越えたロシアですが、今後、ウクライナ紛争はどのように展開していくのでしょうか。私たちはそれとどのように向き合っていけばよいので

しようか。

それを考える材料として次の記事は大いに参考になるように思います。これはベトナム戦争「ソンミ村事件」を暴露したことでピューリッツァー賞を授賞し有名になった伝説的記者シーモア・ハーシュによる記事です。

\* Ukraine will need 117 years to take territories from Russia - Seymour Hersh

「ウクライナは領土をロシアから取り戻すのに117年かかるだろうーシーモア・ハーシュ」  
<http://ummethod.blog.fc2.com/blog-entry-1760.html> (『翻訳NEWS』2023/07/15)

ウクライナ軍の敗北ぶりについては、これまでも繰り返して述べてきましたが、それを欧米から送られてきて破壊された戦車の数や戦死者数ではなく、どれだけの領土を奪還したかという観点で報告されたこの記事は、その意味で極めて異色のものでした。

ウクライナの反転攻勢の犠牲は甚大で、ロシアの安全保障会議によると、先週時点でのウクライナ兵の戦死者数は1万3000人と推定されている。(中略)

匿名の情報源から得られた戦場の統計を引用し、ハーシュは、ウクライナ軍が戦闘の過去10日間でロシアが支配する土地をわずか2平方マイルしか奪取できていないと主張した。

さらに、その前の2週間では、ウクライナ軍はわずか44平方マイルの領土を占領したが、そ

の多くはロシアの複数の防衛ラインの最初のラインの前方にある空き地だった、と続けた。

「かつてウクライナの一部であった4万平方マイルの土地に関しては、ある「情報通の高官」は、その領土を再びキエフの支配下に置くためには、「ゼレンスキー大統領の軍は117年かかるだろう」とハーシユに述べた。

キエフ政権は、今までに何度も敗北し、そのたびに和解・休戦しようとするのですが、すると必ずイギリスやアメリカが乗り出してきて、「和解するな、金と武器をやるから最後のひとりになるまで戦え」と言われて現在に至っています。

それに押されてゼレンスキーも今では「クリミアを初めとする領土をすべて奪還するまで和平交渉に応じない」と言われるようになってきました。しかし、ハーシユ記者の言うように、今の戦況でその目標を達成するには「117年かかる」というのですから、気が遠くなるような話です。

しかしそれ以前に、ウクライナの地で戦うウクライナ兵士がすべて戦死し、そこで戦っているのはウクライナ軍の軍服を着た外国人傭兵ばかりになる可能性があります。でも NATO軍にとっては、それでも一向にかまわないのです。

なぜなら、先述したように、英米を初めとするNATO軍の戦争目的は、「ロシアを弱体化すること」、あわよくば「ロシアの政権転覆を実現し」、かつてのソ連崩壊後のように、「ロシアをアメリカ企業が食い荒らすことが可能な国」にすることですから、ウクライナ人やウクライナの地がどうなるうが気にならないのです。

13

英米のこのような歪んだ人権感覚を象徴的に示すのが、「世界各国で署名または批准で禁止されている劣化ウラン弾やクラスター爆弾」の提供でしょう。

イギリスはキエフに劣化ウラン弾を提供し、アメリカはクラスター爆弾を提供しようとしています。このような兵器が使われれば、ウクライナの地は死の灰に満ち、地面にはクラスター爆弾の残骸が散乱しますから、危険すぎて人の住めない土地になります。

しかも、劣化ウラン弾やクラスター爆弾をキエフに送るのは、イギリスやアメリカの武器庫には「もう送るべき弾丸がない」という理由なのです。呆れてものが言えません。

人権と民主主義という大義を掲げて、「独裁者プーチンと戦う」と豪語している欧米諸国の「人権感覚」がいかなるものかは、この一事だけでも明瞭です。



イーロン・マスク

「クラスター爆弾は米国の地位をおとしめている」と厳しく批判しているイーロン・マスクという大富豪が、アメリカに一人だけでもいたということが、せめてもの救いと言うべきでしょう。次の記事はそのことを示すものです。

\* US 'debases itself' by sending cluster munitions to Ukraine

「Musk「米国がウクライナにクラスター弾を送るのは『自らの地位を貶める行為だ』——イーロン・マスク談」

<http://innerehodblog.fc2.com/blog-entry-1801.html> (翻訳NEWS]2023/07/23)

14

このような状態が続けば、いつになっても戦争は終わらないと考えられますが、他方、それ以前にEUが崩壊するかも知れません。ロシアに対する経済制裁の「ブーメラン効果」で青息吐息の状態がEU諸国だからです。

ドイツに至っては安い石油や天然ガスがロシアから輸入できなくなりましたから、倒産する企業が多く出てきたり、工場をアメリカに移転するところも出てきています。ですか

らEUが先に崩壊すればウクライナにも平和が訪れるでしょう。

これはアメリカについても同じです。

来たるべき大統領選挙のためにトランプ対バイデンの争いで、いまアメリカは一種の「内戦状態」です。しかも大都市にはホームレスのひとたちのテント村が広がる一方ですし、鉄道や道路などのいわゆる「インフラ」も、崩壊寸前です。

アメリカの金融危機もいつ爆発するか分からない状態です。

ですからアメリカが崩壊すればウクライナ紛争は終わりますし、それ以前にバイデン大統領が再選されなければ、その時点でウクライナ紛争も終わりますが、そうさせないためにバイデン政権がどのような「偽旗作戦」をでっちあげるか予断を許しません。

ロシアが仮想敵国と目されているわけですが、実はドイツも放置しておくと将来アメリカの競争相手になる可能性がありますから、これを機会に今のうちにドイツを潰しておこうという思惑もアメリカにあります。

つまりウクライナ紛争は「ロシア潰し」と「ドイツ潰し」で「一石二鳥」なのです。

同じことは日本についても言えます。中国やロシアに対する経済制裁の「ブーメラン効果」で日本経済も潰される危険性が大きいにあります。アメリカにとっては日本も「潜在的

競争相手」ですから、「中国の脅威」を口実に、いつ潰されるか分かりません。

このように私たちは、ウクライナ紛争から学ぶべきことが山積しています。一番良い方法はロシアへの経済制裁に加担しないこと、ウクライナへの資金援助や武器援助をしないで「中立」の姿勢を守ることです。事実、アジア、アフリカ、中南米のいわゆる「グローバル・サウス」の国々は、ほとんどが「中立」の姿勢を維持しています。

また今まで述べてきたことから明らかなように、ウクライナに援助すればするほど戦いは長引き、死者が増えます。いま一番求められていることは「ウクライナに援助しないこと」であり、それが逆に和平交渉の気運をつくり、死者の数を減らします。

また、いまウクライナに援助すればするほど戦いが長引き、それを一挙に解決するため、ロシア軍がキエフを占領するという行動に出ざるを得なくなるかも知れません。そうなれば、ウクライナはいま死守している領土すら失うことにもなりかねません。

「プリゴジンの乱」が終わった今こそ、平和を構築する絶好の機会ではないでしょうか。それともシーモア・ハーシュの言うように、あと「117年」も戦いを続けるつもりなのでしょうか。

## 〈追記〉

私は初め、ドイツにつながる海底パイプライン（ノルドストリーム1・2）を爆破したのは、ロシアを痛めつけるためだと思っていました。

が、考えてみればロシアは、天然ガスをドイツやEU諸国に売らなくても中国などアジアには売って欲しい国々はいくらでもあります。むしろロシアからの天然ガスが手に入らなくて困るのはドイツを初めとするEU諸国なのです。

日本もシベリアからの天然ガスを買えば、安くて良質です。このように考えると、あの爆破はドイツに自国の高い天然ガスを買わせて隷属国家にしようとするアメリカの仕業だと考えた方がはるかに納得できます。

そう思っていたら、シーモア・ハーシュがみごとに私の推理どおりの記事を書いてくれました。

\* US behind Nord Stream sabotage - Legendary NYT journalist

「ノルドストリーム破壊工作の影に米国あり——伝説のNYT紙記社シーモア・ハーシュ」

<http://tmmethod.blog.fc2.com/blog-entry-1270.html> 【翻訳NEWS】2023/02/13

〈追記2〉

この「プリゴジンの乱」がプーチン大統領の「やらせ」作戦だったという解釈は、高名な評論家ペペ・エスコバル (Pepe Escobar) も、次の小論で、ロシア伝来の軍事作戦「マスキロフカ」という用語を使って説明しています。

\* A Matryoshka of Psyops: And Why General Armageddon Is Not Going Anywhere  
「心理作戦のマトリョーシカ：そしてなぜ「アルマゲドン将軍」はどこにも行かないのか」  
<http://unmethod.blog.fc2.com/blog-entry-1749.html> (『翻訳NEWS』2023/07/13)

ペペ・エスコバルが、私とほぼ同じ解釈をしていることに驚くと同時に嬉しくも思いました。ただし右記の小論はエスコバル特有の文学的表現が前面に出ているので、必ずしも分かりやすい翻訳になっていないので訂正版を出す必要があるかも知れません。

また、題名の「心理作戦のマトリョーシカ」における「マトリョーシカ」も、これがロシアの有名な民芸品「入れ子人形」であるという注釈を付けるか、せめて「マトリョーシカ(入れ子人形)」としてほしかった、と思いました。

あるいは、開けても開けても次の人形が出てくる「入れ子型の人形」ですから、そのような画像(次頁)を付けた方がよかったですかもしれません。

いずれにしても、プーチン大統領の作戦が、このような複雑な「入り人形」のような作戦だったということを、ペペ・エスコバルは言いたかったのでしょう。ちなみに「マスキロフカ」は、たぶん風邪をひいたときに顔に付ける「マスク」に由来するのだと推測しています。警察が交通違反を取り締まるために利用する「覆面パトカー」も、一種の「マスキロフカ」作戦ではないでしょうか。



### 〈追記3〉

「ワグナー軍団」の指導者プリゴジンの死は私たちに何を語っているのか

ウクライナ紛争で「キエフ軍の要衝だったアルチョモフスク(別名バフムート)を陥落させただけでなく、モスクワをめざして進軍した「プリゴジンの乱」をおこしたことでも有名になったプリゴジン氏が、自家用機の墜落事故で死亡したと報じられています。

これを欧米メディアは早速「プーチンが裏切り者を処分したのだ」と大声を上げ始めています。日本でも慶応義塾大学の広瀬陽子教授は「ロシアのプーチン大統領が命令した



可能性が高い」と述べ、欧米権力の御用学者ぶりを発揮しています。

\* 「プリゴジン氏、死亡か」ロシア専門家はこう分析  
<https://www.nikkei.com/article/DGXZQOCB241W30U3A820C200000/>

しかし、「プリゴジンの乱」はベラルーシ大統領ルカシェンコの仲介により、「ワグナー軍団」にベラルーシという新しい活躍の場が与えられ、アフリカのニジェールからもワグナー軍団に援助の要請が出て、慌ててヌーランド国務次官がニジェールに駆けつけるという事態になっていたのですから、この進展をプーチン大統領が破壊しても、何も得るところがありません。

\* Wagner boss expresses 'joy' over Victoria Nuland「ワグナー代表が、ウイクトリア・ヌーランドに「感謝」を表明」  
<http://unmehod.blog.fc2.com/blog-entry-1872.html>（翻訳NEWSJ 2023/08/12）

アメリカやNATO諸国はウクライナの「反転大攻勢」が失敗し、他方で南アで開かれているBRICS

の会議が大成功でしたから、このニュースをかき消すための大事件が必要でした。案の定、「プリゴジンの死」は大手メディアのトップ記事となり、「反転大攻勢の失敗」と「BRICS会議の大成功」は完全にメディアから消えました。

このような経過を考えると、「プリゴジンの死」はCIAあるいはキエフ諜報機関の仕業だったのではないかと考える方が、はるかに納得できます。

事実、次の記事によれば、「破片の一部は主要な墜落現場から数キロ離れた場所で発見され、飛行機が高高度で破片化した可能性を示している」からです。

\* Prigozhin plane crash: Investigation, versions, aftermath (プリゴジン機の墜落事故…調査・発表・余波)  
<https://www.rt.com/russia/581807-wagner-prigozhin-death-investigation/> 25 Aug. 2023

この記事は、また次のような事実も報じています。

ロシアのメディアが引用した情報筋によれば、ジェット機は仕掛けられた爆弾によって空中で破壊された可能性が高く、その犯人として、搭乗しておらず行方不明とされているプリゴジンの専属パイロットを挙げる者もいる。



フレッド・ハンプトン  
(ブラックパンサー党イリノイ支部長)

かつてブラックパンサー党イリノイ支部長だったフレッド・ハンプトン(Fred Hampton)が自宅で暗殺されましたが(一九六九年)、キング牧師やマルコムXが暗殺された後の黒人運動における次の若き指導者と目されていただけに、その衝撃は実に大きなものがありました。

さらにもっと大きな衝撃を与えたことは、この暗殺に手を貸したのが内部に送り込まれたFBIのスパイだったという事実です。しかも、その人物はフレッド・ハンプトンが最も信頼をおいていた彼のボディガードでしたから、なおさらその衝撃力は大きかったのです。

ですから、先に引用した記事で「その犯人として、搭乗しておらず行方不明とされているプリゴジンの専属パイロットをあげる者もいる」と書かれていましたが、このような推測をしても何ら不自然ではない事実が、FBIやCIAによる暗殺記録には満ちているのです。



アフリカを「さらに自由に」するために活動していると語ったプリゴジン

なおプリゴジンに関して次のような記事もあることを  
付け加えておきます。

\* Wagner boss announces major move 'to make Russia greater'  
(ワグナーのボスが「ロシアをより偉大にする」ための大きな動きを発表)  
<https://www.rt.com/russia/581613-prigozhin-in-africa/> 21 Aug. 2023

この副題は次のようになっていました。

\* The group is working to make Africa "even more free," Evgeny Prigozhin said in an address apparently filmed on the continent  
(エフゲニー・プリゴジンは「アフリカで撮影されたと思われる演説の中で、アフリカを「さらに自由に」するために活動していると語った」)

このような活動を始めたばかりの人物を暗殺して、ロシアやプーチン大統領にどんな利益があるというのでしょうか。先述の広瀬陽子教授は「ロシア専門家」ですが、いったい彼女は専門家としてどんな基礎的教養を身につけてきたのでしょうか。

〈本章のキーワード〉

「シンスク合意」1・2

ドイツの前首相アンゲラ・メルケル、フランスの前大統領フランソワ・オランド

フォーブス (Forbes) : アメリカの経済誌)

FSB (ロシア連邦保安庁)

FBI (アメリカ連邦捜査局 : Federal Bureau of Investigation)

NAC (National Antiterrorist Committee : ロシア国家反テロ委員会)

コインテルプロ (COINTELPRO, Counter Intelligence Program : FBIによる秘密テロ活動)

マルガリータ・シモニャン (Margarita Simonyan, RT編集長)

クセニア・ソブチャーク (Ksenia Sobchak, ロシアのジャーナリスト)

シーモア・ハーシュ (Seymour Hersh, 伝説的ジャーナリスト、現在86歳)

エフゲニー・プリゴジン (Evgeny Prigozhin, 「ワグナー軍団」経営者)

スコット・リッター (Scott Ritter, 米国連の兵器査察官)

ワグナー軍団 (PMO "Wagner Group")

BRICS (Brazil, Russia, India, China, South Africa)

フレッド・ハンプトン (Fred Hampton, ブラックパンサー党イリノイ支部長)

ブラックパンサー党 (Black Panther Party, BPP) あるいは黒豹党 (くまひょうどう)

## 著者紹介

---

寺島隆吉 (てらしま・たかよし)

1944年生まれ。思想家。東京大学教養学部教養学科(科学史・科学哲学)卒業。元、岐阜大学教育学部教授。現在、国際教育総合文化研究所所長。

岐阜大学在職中に、コロンビア大学、カリフォルニア大学バークレー校、サザンカリフォルニア大学客員研究員、ノースカロライナ州立A&T大学(グリーンズボロ)およびカリフォルニア州立大学ハイワード校の日本語講師などを歴任。

訳書：『衝突を超えて—9・11後の世界秩序』(日本経済評論社)、『チョムスキー、アメリカンドリーム<sup>の</sup>の終わり—富と権力を集中させる10の原理』(Discover21)、『チョムスキーの教育論』『チョムスキー 21世紀の帝国アメリカを語る』『肉声でつづる民衆のアメリカ史』上下巻(以上、明石書店、共訳書：ロートブラッド他(編)『核兵器のない世界』(かもがわ出版)など多数。

著書：『コロナとウクライナをむすぶ黒い太縄 1—まだどれだけ殺すつもりか イベルメクチン<sup>の</sup>圧殺とファシズム化するアメリカ』『同2—「プーチンの大罪」?そして未来はEUの崩壊かゼレンスキーの降伏か』『同3—闘うイベルメクチンの飲み方・使い方。コロナもワクチンも、国防総省が開発した生物兵器』『同4—殺したのは誰?なぜ?安倍暗殺からプリゴジンの死まで』『ウクライナ問題の正体 1—アメリカの情報戦に打ち克つために』『同2—ゼレンスキーの闇を撃つ』『同3—8年後にやっと叶えられたドンバス住民の願い』『コロナ騒ぎ謎解き物語 1—コロナウイルスよりもコロナ政策で殺される』『同2—[メディア批判]赤旗から朝日まで』『同3—ワクチンで死ぬかイベルメクチンで生きるか』『レポートの作文技術』(以上、あすなろ社)、『英語教育原論』『英語教育が亡びるとき』『英語で大学が亡びるとき』(以上、明石書店)など多数。

論文：「ケプラーにおける調和論の諸問題」(日本科学史学会『物理学史研究』第4巻第3・4合併号 17-32頁、1969年)など多数。

## コロナとウクライナをむすぶ黒い太縄 4 殺したのは誰?なぜ?安倍暗殺からプリゴジンの死まで

2023年11月26日第1刷発行

著者：寺島隆吉

発行者：紫田陽子

発行所：有限会社あすなろ社

〒502-0071 岐阜県岐阜市長良2794-1

Tel & Fax 058-297-1509

装画：青山桂己

装幀：有限会社ロフロデザイン

印刷所：株式会社太洋社